

『嘔吐』：テーマの外側にあるもの

《L'esprit de sérieux の拒否》

川 神 傳 弘

実存主義はなによりもまず主体性の維持、ないしはその回復の運動であった。誰れとでもとりかえのきく「人」の状態や独自の人格を喪失して無名の大衆に埋没することなどの拒否であり、自己の独自の主体性追求のための不断的努力は、人間存在に一つの意義を与えるための論理を人間と世界との関係に求めることに向けられ、それはときとして悲惨な様相をも呈した。

人間と世界との関係、いいかえれば主体と物、そしてそれら両者の出逢い：サルトルの「存在論」もまた意識の存在様式の把握のための論理的出発点を、主体と物との平面上に置いている。いうまでもなく、サルトルはその哲学的拠点をデカルト的コギトから起すがゆえにどちらかといえば主体＝対自存在により比重のかかる観はまぬがれえぬが、畢竟対自は即自＝物なくしては存在しえない以上、即自は対自に対してあくまで存在論的に優位に立っていることは否定できない¹⁾。このような意識に対する物の絶対的優位の意識が、サルトルの初期の大方の作品群の根底をなす Contingence (偶然性) の直視²⁾ と緊密に結びついているのであり、あらゆる現象の特性を contingency という支柱に求める現象学的考案が、彼一流の論理的構築の重要な素因である facticité (事実性) の観念を招来したのである。彼以前にもハイデッガー等によって facticité の意義の重要性は

1) 『L'Être et Le Néant』, J. P. Sartre, Gallimard, Première Partie 及び Deuxième Partie より

2) Ibid., Première Partie 及び Deuxième Partie より

唱えられていた。しかし、サルトルは異常にこの観念に執着を示した点で前者とまったく異なる、新しい境域に足を踏み入れている。

それでは、こうした contingency, facticité 等の観念は何の目的で、或いはどのような論理展開を可能にするためのものであったろうか。その末端においていくつかの帰結を挙げる事が出来るが、要は liberté の具象化、定義づけまたその獲得にあったたであろう。不安を人間の条件 (Condition humaine) として、人間存在を passion inutile として明確化するために、対蹠的位置に置かれた facticité は十分に効果的であった。常に不安な状態を宿命づけられている対自存在の不断の生成が、自由そのものであるとすると、contingence, facticité 等は不安：自由：人間の条件の絶対的要因であることになる。

現像学的還元＝判断中止³⁾ (因果的説明と論理的分析との共犯関係を断ち切って、知覚の不透明性を確保すること) の所産である、これらの観念とサルトルの執拗な明晰さへの執着が必然的に旧守のモラルの忌避に及んでゆくことに対して、何らの説明も不要であろう。逆に言えば、facticité を殊更に重視することにより、彼は旧守のモラルの徹底的潰滅を計ったことにもなる。

——道徳秩序と宗教への訣別——

一口に engagement の文学とはいいいながらも『La Nausée』『Les Chemins de la Liberté』等の登場人物が、マルローの主人公達のように積極的な選択によって政治や革命、或は決定的な行為に身を投じることをせず、ロマネスクな色彩を帯びた華やさを一切失っていることに不満めいたものたりなさを感じるのは私一人ではあるまい。Roquentin や Mathieu の挙動を、むしろ désengagement と見做す人の方が多いかも知れない⁴⁾。しかし、これら両主人公達はむしろ極端な慎重さをもって対自存在の不断

3) Ibid., P. 227 周辺

4) L'ARC 30, De Roquentin á Mathieu, Annie Leclerc, p. 71

の生成過程 = 自由への道程を歩む苦行者の役割を付与されている、いわば実存主義のジャンセニストの姿であるという好意的な見方をとることによってこの小論を始めることにしよう。

道徳的価値の褪色はサルトルにはじまることではない。社会道徳と純粋な魂との抗争は、従来の殆どすべての小説の重要なモチーフであったと言い切っては行き過ぎであろうか。あるいは教会という形、あるいは神、倫理、世論等の既成の一般通念とひたむきで悲惨な魂の谷間に生じる血みどろの葛藤は、いやがうえにもパテライックなドラマを盛りあげずにはおかなかった。近いところではジッド、モーリャック、ベルナノス等の主人公達によって経験済みである。勿論、その葛藤のみを取り上げてこれにスポットをあてるのであれば、サルトルの主人公達の誰れ一人として、ジェローム、アリサ、或いはテレーズら以上に深刻な闘争を戦かうことの出来た人物を見出すことは出来ない。ドラマティカルな筆法は彼のよくするところでないという技倆的機能の欠如も当然これに与かるところ少なくないようでもあるから。

例えば『Les Mouches』のオレスト⁵⁾は神と抗争する人としてよく引き合いに出される。しかし、Jupiter は「キリスト教的悲劇」を背負った姿で Oreste の眼前に現われているであろうか。また、Oreste は受肉、贖罪がその指導的テーマであるところの宗教に畏れを抱きながら立ち向う姿で Jupiter の前に存るであろうか。Jupiter にせよ Oreste にせよ、二元性相克のドラマを演じる主人公としては夫々が役者として不足たるの感をまぬがれないであろう。かたや神たるの威厳に欠け、運命を支配する絶対の力を持ち合さぬ非絶対者に引き落された者である。それ故、Oreste の葛藤は宗教とのそれとは見えず、単なる conformisme との抗争に置きかえられたかの観がある。Oreste が Jupiter に反する一大決心 (choisir) をしたこと自体、non conformiste に転身しただけのことにすぎないと思われる。いわばパリサイ主義と原始キリスト教徒の対比がそこにはある。choisir

5) 『Les Mouches』の主人公。

する以前の Oreste は《マグダラのマリアがイエスの足元に香油を注いだ折、その行為を非難するユダ⁶⁾》、《妹、マリアの不実を責める姉、マルタ⁷⁾》に比較されうる。オレストが

《je veux être un homme de quelque part, un homme parmi les hommes.⁸⁾》のようにエレクトラに告げ、かつそのように実践行動を起す動機、理由が、二人並んで入れぬ天国の狭き門の前で、ひたすら、厳格なる神の思召しが、ジェローム一人の身に施こしあらんことを願いつつ身を引くアリサの自己犠牲以上に高い密度を具えているとは思われない。『Les Mouches』、『Le Diable et Le Bon Dieu』等の作品において、作者はいずれも神と人間という二元的相克にテーマを求め、パティックで激烈な闘争的状况を設定しながらも、作中人物の incarnation には必ずしも成功を治めているとは思われない。

同様に、逡巡と懐疑を重ねるだけの Mathieu や、汚穢にみちた世界を浮き沈みする Roquentin が異常にとり憑かれているものも、即自への嫌忌という形をとりながら内実は conformisme との闘争ではないかと思われる。サルトルにおける神の観念が、彼の内的生活の極度な偏執的固定観念によって捏造された事大主義によるものであるとすれば、彼の疎外感覚もまた夢幻的かつ provisoire な性格を含んでいることになる。精神と物質の合成体である人間が、精神のみの一元的完全性である神の非存在と非力とを短兵急に証明しようとする余りに方向を見失い、攻撃の矛先が神そのものから転じて、神を取り巻く人間に向けられていることも考えられる

6) 『新訳聖書』、マルコによる福音、14章1～9。

7) Ibid., ルカによる福音、10章38～42。

8) 『Les Mouches』、J-P. Sartre, Le Livre de Poche, P. 137—サルトルはこの戯曲以降(神)を人間に対する根本的障害として、彼方に押しやっている。そこにあって、彼は、キリスト教のみならず、世界に一つの秩序が存在するという想定、religion naturelle の如きものをも一切含めた、あらゆる秩序の破壊をも企だてた。オレストの転向はアリストクラチックな《世俗嫌忌》からソフィスト的《実践道徳》への移行とも受け取ることが出来る。

のだから。この小論では、特に『嘔吐』の周辺を廻って、ユダやマルタの不実を、キリスト教的回心の尺度で推し計る要領で、『嘔吐』の作中人物を la conversion existentialiste (実存主義的回心) から透視することで、sérieux のバランスの問題を考えてみたい。

まず、サルトルの sérieux の定義に触れておく必要がある。

—l'esprit de sérieux とは—

大著『L'Être et Le Néant』に記されている l'esprit de sérieux の項目を二三拾ってみよう。

(1)「不安は、諸価値の擬物論的固定的な実体化のうちに安住している『くそまじめな精神』とは正反対のものである」⁹⁾

(2)「遊戯は、くそまじめな精神とは反対に、最も所有的ならざる態度であるように思われる。遊戯は現実的なものから、その現実性を除き去る。われわれが世界から出発するとき、またわれわれが自己自身に対してよりも、世界に対していっそう多くの現実性を帰するとき、あるいは少くとも、われわれが世界に属する程度に応じてわれわれが自己に現実性を与えるとき、そこにくそまじめな精神が生じる。唯物論がくそまじめであるのは決して偶然ではない」¹⁰⁾

(3)「くそまじめな人間は、世界に属しており、もはや自己のうちに何らの拠りどころをもたない。くそまじめな人間はもはや、世界から脱出する可能性をさえも考えていない。なぜなら彼はみずから自己に対して、岩の存在類型、堅固、惰性『世界—のただなか—における—存在』の不透明性を与えたからである」¹¹⁾

(4)「事実、『くそまじめな精神』がもつ二重の特徴は、諸価値を人間的主体性から独立した超越的所与とみなすこと、そして、『望ましい』という性格を、事物の存在論的構造から、事物の単なる物質的構造へと移すこ

9) 『L'Être et Le Néant』, P. 77

10) Ibid., p. 669

11) Ibid., p. 669

とである」¹²⁾

このように、すでに探求の真の目標設定の不必要な存在、目標設定の準拠が擬物論的固定的な実体でしかないような存在〔岩や木の根と同じ存在⇨即自存在〕が *l'esprit de sérieux* であるといえる。更に、*sérieux* を『名詞』として扱うことにより反語的諧謔を含ませ、忌むべき対象としての *image* の鋳型にはめこみ、ベトンでもって固めてしまったのである。アプリアリなあらゆる外的価値を排除することで、絶えざる不安の沼を彷徨し、未だあらざる自己を未来に向けて追い求めることで絶えざる *manque* の現出を余儀なくされる《意識の目的性の主張》、《存在しないものとしての認識の定義》、つまり、恒常的運動を止めることの出来ぬ思惟、対自＝無＝虚無化 (*néantisation*)、*le pour-soi* の *éccéité*＝存在論的懸念 (*souci*)、それ故、絶えず様々な振幅でもって両極間を振り運動する揺錘。非 *sérieux* (くそまじめでないもの) を敢て説明するならば、おそらく上記のようであろう。いわば、前出の《ユダ》、《マルタ》は《*l'esprit de sérieux*》の範疇に属するかも知れない。

しかしながら、現代は聖書の時代から遠く隔たっているし、元来、人間性を、そのように典型的に処理すべき性格をもたない文学的手段たる小説、というジャンルで表明する場合、一層濛漠たるの観をまぬがれえないであろう。激烈、頑愚なる個性の鋳型にはめこまれた作中人物達が、おのおのの典型の枠の域を一步も逸脱することなく生活を演じてゆくことを余儀なくされているバルザックの時代が疎んぜられて、現代の作中人物がより自由な行動をとり、作者自身からさえ独立しているかの面貌をすら呈するに至った裏には、そうした類型化への拒否があった。とはいえ、サルトル自身が述べているように、《自分の意味は他人が奪う、或いは、自分とは他者が自分から剥ぎ取る意味においての自分でしかありえない》ものならば、《*On ne peut échapper au solipsisme*》¹³⁾ は免がれえないであろう。

12) Ibid., p. 721 以上 9)10)11)12) は、いずれも『人文書院』松浪信三郎訳による。

13) 『*La Transcendance De L'Ego*』J-P. Sartre, VRIN, VIII, *L'Existence d'autrui*, P. 127

以上、概略的にあげつらってきた問題を、とりわけ、サルトルの『嘔吐』を中心に、拾いあげてみることにする。

— de sérieux の罪と存在の罪 —

1938年に発表されたこの傑作が我々に闡明した世界は、le sentiment d'être trop に代表されるように、彼流の存在論の情緒的開陳であった。作中、大部分を構成する大方の表現は極めて鄙猥、かつ汚濁に満ちている。『嘔吐』の主題を明確ならしめるために為される実存の心理分析が呼び起こすものは、デュカスやセリーヌ風の肉欲的幻覚と偏執的固定観念に憑かれた人間の小宇宙である、湿気、黴臭い匂い、ねばつくような悪感、わらじむし、あぶらむし、蠅等々が漂ようところの俗的水準以下の汚穢な表現群の林の意味するものは、《aboutit toujours à nous montrer l'homme plongé dans l'enfer de l'immanence¹⁴⁾》ではあるが、その根底にあって、サルトルのねらいとしているものは、意味的世界の解体にあるであろう。その解体作業の間接的対象として、ロカンタンが対峙する二人の問題を含む存在が《l'Autodidacte, 独学者》と、今一人《les moments parfaits》の執拗な追求に生きる《Anny, アニー》である。

(1) l'Autodidacte

サルトルは前出の l'herbier métaphorique を援用しつつ、巧みにこの2つの攻撃目標を搦手から攻めてゆく。ロカンタンの目に映る独学者の姿は《lâche》、《Salaud》¹⁵⁾ であり、mauvaise foi の信奉者の域を出ない存在でしかないにも拘らず、《En le voyant, j'eus un moment d'espoir :

14) 『Métamorphose de la Littérature』, II°, de Proust à Sartre, Pierre De Boisdeffre, Édition Alsatia, J. P. Sartre ou L'impuissante Liberté, p. 261
—“肉欲的幻覚、糞便論による偏執的固定観念の表現群を、ポワドゥフル氏は《l'herbier métaphorique (隱喩的植物誌)》と称している。”

15) Ibid., p. 251—Ceux qui se cachent leur total liberté, Sartre les appelle des lâches. —Ceux qui croient que leur existence est nécessaires, Sartre les appelle des Salauds...

à deux, peut-être serait-il plus facile de traverser cette journée. mais, avec l'Autodidacte, on n'est jamais deux qu'en apparence.¹⁶⁾》
 暗に自己の分身を、その《salaud》の中に認める気弱さがロカントン（この時期におけるサルトル）にうかがえる。ロカントンがこのエセ・ヒューマニストたる独学者の何たるかを知り、決定的に忌むべき対象に貶めてしまふ動機は、或る日、ヴーヴィルの図書館でロカントンが偶然目撃した独学者の行為にある。独学者はその図書館にあるありとあらゆる、数限りない書物をアルファベット順に読むという、遠大なる計画を7年前から黙々と、執拗に実行しつづけていたのだ。甲蟲類の研究書から、量子論、次ぎには『ウージェニー・グランデ』というぐあいな、まったく無秩序、無配慮、全蔵書を読了する以外の何らの目的無しの行為はロカントンを身震いさせた。独学者の何なるかを説明するに、この一事実以外の他の一切の説明は不要である。かく明晰に《salaud》の烙印を、一方的に押しつけたものの、水切り小石や公園の木の根が呼び起こす即自存在の重量感に喘ぐロカントンにとって、独学者＝他者の存在はやはり一つの救いなのである。《Je l'avoue: ce matin j'étais presque heureux de le revoir, j'avais besoin de parler.¹⁷⁾》

どのような仕方にもあれ、ロカントンは独学者を完全に無視しつづけることは出来ない。『自由への道』の Mathieu が内心軽侮の念を抱きつつも、これもやはり《Salaud》の側に与する実兄 Jacque に頼らざるを得ぬあの関係（対自は即自なくしては存在しない）において…

この mauvaise foi の信奉者（l'Autodidacte）に対する糾弾の根拠は何処にあるのか。サルトルが彼に《l'esprit de sérieux》を吹込んでいることは一目瞭然である。独学者こそは、くそまじめな精神の典型的最右翼である。

なぜなら、《くそまじめな精神においては、私は対象から出発して私自

16) 『La Nausée』, J.-P. Sartre, Le Livre de Poche, p. 110.

17) Ibid., p. 148.

身を規定するのであり、私は私が目下着目していないようなのみを、すべて不可能なものとしてア・プリアリにしりぞけ、私の自由が世界に与えた意味を、世界の方から来たものとして、私の義務と私の存在を構成するものとしてとらえる。¹⁸⁾》

この説明は、l'Autodidacte への献辞としてまさにぴったりである。が、他方、なぜロカントンは独学者を徹底して無視することが出来ないのか、という問題は依然として残されるであろう。『嘔吐』に遅れること6年の後に出た『出口なし』に見られる《l'enfer, c'est les Autres.¹⁹⁾》ほど矯激な科白は、この時期の未熟なる engagement の闘士には縁遠いものではあったろう。なぜなら、ロカントンには、また、このことは『分別時代』のマチウに関しても言えることだが、実践に身を挺する成虫以前の幼虫にも似た、一種惰弱を装った神経過敏の明晰さに翻弄されるがままの姿、術学的スタイルがあり、実存主義のジャンセニストたる彼ら両者は、その濫觴をソクラテスの思弁に反抗するメガラ学派のソフィスト達が主張した立場《思弁に対する生の反抗》にうかがうことの出来る、具体的実践の段階には達していないようだ。サルトルの実存主義創世記にあって、恐らく、この時、サンジェルマン・デ・プレにシナイ山はいまだその全容を整えてはいなかったのだろう。『嘔吐』に先立つ一年前、1937年の N. R. F 誌に掲載された『Chef-d'un-enfant』と併せ読む限り、これら二作品は、糞便論記述による facticité 以上のレベルを出ない。

重ねて言うまでもないことだが、『嘔吐』のテーマは、le sentiment d'être trop 《余計者としての感覚》にある。1907年、2歳で父を夫ったこと、1916年の母親の再婚等々その、若きボードレールの境偶に似た状況に加えて、義父と母との面前での受身の有罪感は、《余計》の意識を《原罪》的感覚にまで亢進せしめたことであろう。しかし、サルトルは、そうした complexe を詩や宗教感覚に昇華させる方法に訴えるには、余りに批評精神が旺盛で

18) 『L'Être et Le Néant』, p. 77.

19) 『Huis-Clos』, Le Livre de Poche, J.-P. Sartre, p. 75.

あった。その子供は、義父の父たることに傲慢なる否定を下し、完全なる自治の強烈な肯定によって、自らの悲劇にヴェールをかぶせてしまっている。彼の《自由》が、病的な孤高の影を秘め、《situation》には峻厳に過ぐる *réalité* が感じられるのも、そうした精神的 *batardise* に由来するのかも知れない。こうした事情もあって、彼は、恐らく縦のつながりに頓着することは不可能なのだ。神の秩序、ブルジョワの秩序、社会主義の秩序、民主主義、国粋主義... 何であれ、vertical な関係を拒もうとする衝動を抑制出来ない人間にとっては、人間の超越性のみが絶対の価値を有つ。その人間の在る場所 (situation) は転変極まり無く、まったく偶然で無秩序な様相を呈している。その意味での、自らを取り巻く峻厳な現実性に裏打ちされた “*facticité*” に目をつぶる l'Autodidacte: 純粹反省の目を持ち合せぬ者、これが、ロカタンにとっては腹にすえかねる代物なのだ。

《Ne la tuez pas, monsieur !》 s'écria l'Autodidacte.

Elle éclate, ses petites tripes blanches sortent de son ventre; je l'ai débarrassée de l'existence. Je dis séchement à l'Autodidacte :

《C'était un service à lui rendre²⁰⁾》

偽瞞的ヒューマニズムに対する攻撃も、しかしながら、《なにこいつにサービスしてやったまですよ》とうそぶく以上の言葉とはならない。ロカタンには常に逡巡がある。

《mais... si je ne suis pas indirecte, pourquoi donc écrivez-vous, monsieur ?

—Eh bien... je ne sais pas : comme ça, pour écrire.》 Il a beau jeu de sourire, il pense qn'il m'a décontenancé :

《Ecrivez-vous dans une île déserte ?

N'écrit-on pas toujours pour être lu ?²¹⁾》

しかも、この l'autodidacte の最後の質問には少くとも、かつてのサル

20) [La Nausée], p. 147

21) Ibid., p. 167

トル自身の——ひいてはロカンタンの——姿を適確に表わすものがある。この質問は少くとも、ロカンタンのアキレス腱に食い込んでいる。しかし、彼は頑迷なる意志で対抗するだけの理由と根拠を、次のように考える。

Si l'on s'oppose à lui de front, on fait son jeu; il vit de ses contraires. Il est une race de gens têtus et bornés, de brigands, qui perdent à tout coup contre lui: toutes leurs violences, leurs pires exès, il les digère, il en fait une lympe blanches et mousseuse. Il a digéré l'anti-intellectualisme, le manichéisme, le mysticisme, le pessimisme, l'anarchisme, l'égotisme: ce ne sont plus que des étapes, des pensées incomplètes qui ne trouvent leur justification qu'en lui.²²⁾

が、しかしながら、それだけの理由、根拠も、彼を救うほどの力を持つものではない。Les hommes. Il faut les aimer les hommes.²³⁾このように思い、感じるだけで、あの『嘔気』がこみ上げてくるのである。意味的世界の解体作業を進める——facticitéの認識に対する開眼を性急に迫まる——為めの一手段としての『嘔気』の効果は、それが、観念に訴えられたものによらず、感覚、とりわけ《触覚》を媒体としているが故に、はなはだ大きいと言わざるをえない。主義主張、博愛、同胞愛... 一切を含む観念的因果関係は、verticalなもの、horizontalなものを問わずバラバラに裁断されてしまう。普遍性の破棄と不易永遠性の否定が不条理観のみを残す。自由意志の使用法如何では、神の恩寵による秩序と、存在の偶有性とは両立しうるとするトマス主義の《神の實在と存在の偶然性》並に論も、《触覚》を武器とする思想以前の、非観念の世界に立向っては、徒手空拳に終るほかない。

こうした状況にあって、ロカンタンが、かねてよりの懸案であった M. de Rollebon の研究に対する情熱を失ってゆくのは当然の成り行きであろう。

22) Ibid., p. 169

23) Ibid., p. 173

M. de Rollebon était mon associé : il avait besoin de moi pour être et j'avais besoin de lui pour ne pas sentir mon être.²⁴⁾

ロカンタにとって、ド・ロールボンの持つ意味は l'en-soi の隠蔽扉以外のものではなかった。一時的な嘔き気の鎮静剤にすぎないことに気づいたのである。

Je n'étais qu'un moyen de le faire vivre, il était ma raison d'être...²⁵⁾

こうして、彼はド・ロールボンとの共犯関係に終止符を打つことを余儀なくされる。

la Chose, C'est moi. 再び、彼を柔かく泡立つ世界が取り巻き、内省的不透明界へと誘なう。ヒューマニズムと実在の谷間のどん底に居て、双方の峰の高さを見上げ、見比べつつ徘徊をつづけるロカンタンにとっては、山肌の壁面のざらつきのみが、確かな手応えを伝えてくれるのである。

l'Autodidacte にせよ、M. de Rollebon にせよ、諸々の光背効果によって、ロカンタンを眩惑しつづけていたのであるが、彼の過敏とも見える明晰への執着と病的に研ぎすまされた炯眼は、次ぎ次ぎとそれらのヴェールを取り払ってゆく。ロカンタンの不幸、悲劇を生み出す《不安》の母体がそこにはある、

このように、次々と裏切りに遭いながらもロカンタンには、今一つ救済を感じずる対象が残されている。

(2) アニー：美と倫理

Ce soleil et ce ciel bleu n'étaient que tromperie.²⁶⁾

裏切りと挫折はロカンタンを nihilisme の惰性に酔わせる。少くとも、l'Autodidacte との邂逅以前のロカンタンは《孤独のアマチュア²⁷⁾》でしか

24) Ibid., p. 140

25) Ibid., p. 141

26) Ibid., p. 51

27) Ibid., p. 19 — “Au fond j'étais jusqu'ici un amateur.”

なかった。最後の逃避口はアニーである。湧き上る自己の肉体の实在感覚、嘔き気を催させるねばっこい練り粉の世界、けち臭く、因習的で、窒息させる、ヴァールの町のプチ・ブル階級の耐え難い因循姑息、そうした世界の《事実性》は、ロカタンにとって既に避け難い宿命であることを充分承知の上でありながらも、彼は何処か、高みに向って脱出したい衝動をおさえることは出来ない。これまでの、いくつかの奈落と空虚の体験は、アニーにおいてすら虚妄の光背以上の期待をかける愚を暗示するのだが、

Je vais sans doute revoir Anny mais je ne peux pas dire que cette idée me rendre précisément joyeux.²⁸⁾

彼女はひたすらに《les moments parfaits》を憧憬するが、それをしも、ロカタンにとっての M. de Rollebon 同様、一時的に、自己の肉体所有を忘我させるだけのものでしかないことを、彼はうすうす感づいている。彼女は、《完璧な瞬間》に道德価値の实在化を見る。

Les situations privilégiées? —Être roi, par exemple, quand j'avais huit ans, ça me paraissait une situation privilégiée. Ou bien mourir. —《Quand mon père est mort, j'étais très malheureuse, mais j'étais aussi comme ivre d'une sorte de joie religieuse; j'entrais enfin dans une situation privilégiée. J'ai essayé de faire les gestes qu'il fallait, Mais il y avait ma tante et ma mère, agenouillées au bord du lit, qui gâchaient tout par leurs sanglots.²⁹⁾》

《完璧な瞬間》が訪ずれる寸前には《特権的状态》が醸成されていなければならない。その状態はまったく類い稀で貴い性質、いわばスタイルを持っていなければならない。しかも、それは彼女の les gestes qu'il faut を待ちつづけていなければならないのであり、つまり、振舞うべきヒロインのポーズの余地のある材料として、そこに措定されていることが要求される。彼女は木片に挑む彫刻家の如く、そこで、しかるべき行為に及び、

28) Ibid., p. 91

29) Ibid., p. 207

特権の状態を完璧な瞬間に変えるだけだ。彼女の期待は、想像力と情緒とが飽和状態に達するその一点に集中する、ミスティフィケーションの中で陶酔感に過ぎぬ審美感覚の獲得にある。

《J'essaie de retrouver cette belle fureur qui me précipita du troisième étage, quand j'avais douze ans, un jour que ma mère m'avait fouettée.³⁰⁾》

が、それは常に現在から透し見る過去の幻影に脚色を施し、彩色をするという、直前の事実を後手後手に回って追い駆けざるをえぬ方法による、永遠の未完成に甘んじなければならぬ代物である。その《自己救済》方法は、背後に大きな落とし穴をしたがえた夢想的、かつ provisoire な性質のものである。

たて、よこの連繫の一切を信奉せぬロカントンは、弁証法的振子運動に身を委ねながら、ce dont il manque を、それゆえに不安を生き続けることで、不断の自己超越を自己に課している対自の symbole なのであるが故に、《過去》はロカントンにとって

Ainsi, comme l'emplacement, le passé s'intègre à la situation lorsque le pour-soi, par son choix du futur, confère a sa facticité passée, une valeur, un ordre hiérarchique et une urgence à partir desquels elle motive ses actes et ses conduites.³¹⁾

未来を拘束する状況へと積分された、facticité の一要素としての機能し

30) Ibid., p. 204

31) 『L'Etre et Le Néant』, p. 585

“彼は《過去》の持つ意味をまったくないがしろにしているわけではない。過去はもはや存在しないが、過去の存在に関する記憶は仮定、予測、予想を暗に含んでおり、こうした存在論的予測が、脳の痕跡の有名な仮説を招来したのであるが、たとえば、無の中へ過去が瓦解したとしても記憶（脳の痕跡）が実在するのであるから、それが、現在の観念や現在の肉体の中で活動中であるかぎり、事実上の存在は持たぬとしても、それらは総合的に、現在を形成する、facticité の一要素であるわけなのだ。”この件に関しては、『存在と無』,第二章の、La Temporalité の項にくわしく述べられている。

か持ち合わせていないのである。それゆえ、contingence の直視に憑かれて³²⁾ いるロカントンは、あまりにも粗い現実の土壤に直接手を触れること以外の立場（例えば、過去—現在—未来の超時間的空間に浮遊する、記憶と想像による合成感情）をひきうける余裕がない。彼が大いに腐心しているのは、考えること、選ぶこと、排除すること——実存し、自ら自分を欠如とし、無化すること——美しい、凝結した世界や、首尾一貫性や、安楽な態度を訴訟にかけることなのだ。故に、アニーの求める《完璧な瞬間》という美的世界も、当然彼の作成する訴状の一項目に加えられているはずだ。甘さ、豊かさ、美、偉大等々は想像力によって支配されているということに加えて、アニーの審美的態度（l'attitude esthétique³³⁾）には、欲せられた一つの感情と体験された一つの感情とのあいだの差異を趣味的に鑑賞するという、現実を遊離した場所に開化する空想があるからなのだ。現実の苦難——ロカントンにとっては吐き気——の処理の仕方において、世間一般的な価値、抽象的原理、神話的未来、宗教的理論、絵画美的昇華、ニヒリスティックな情念等々のアプリオリは、従って主体性の介入する余地のない方法に訴える立場は、ロカントンと逆の世界に属しており、それらは、いずれも《de sérieux》のそしりを免がれえないのである。とりわけ、《瞬間》に凝縮された pathétisme は情念の有無に左右され、情念は本能という動物的条件に影響されるがゆえに、それはすでに、生理学的メカニズムの science の領域に属しているという理由による。

——再び、de sérieux について——

以上、作品『嘔吐』のテーマの外側をざっと横目でにらみながら流し歩いてきたのであるが、途中、幾つかの疑問を置き去りにしたままの遊歩であった。それらを、十把一からげに拾いあげて、しかるべき風袋に収める

32) 《憑かれた人、サルトル》, Pierre Boutang.

33) 『Pour une morale de l'ambiguïté』, Simone de Beauvoir, Gallimard, III.

1. L'Attitude esthétique.

ことで、拙論を閉じることにした。

《われわれの文学は「深奥の誠実さ」を手に入れようと努力している。こゝに、深奥の誠実さというのは、単に表現に対する誠実さではなく、それよりも守ることのさらにむつかしく、さらに稀なものである。ある種の人々は真に誠実な感情をけって味わうことなく人生を過ごしてゆく…死ぬことさえも彼らにとってはひとつの模倣なのだが…³⁴⁾》

R. M. アルベレース氏は、ジッドの『日記』に事寄せながら、現代作家の対象観察態度に欠くことの出来ぬ《誠実さの狂おしい追求》を、上のように述べる。勿論、こゝに語られる誠実さは、これまで問題として引きずってきた sérieux と無関係なものではありえない。サルトルの指摘する問題も、それを把えるアングルの相異をのぞけば、恐らく同一場所の上にある。もっとも、こうした問題はなにも二十世紀になって忽然と浮かび上ってきたわけではないであろう。又、sérieux が要求する《lucidité》においても、過去の作家はことごとく《明晰》を心がけなかったかといえ、むしろその逆であると答えざるをえないはずだ。「誠実さ」、「明晰」等は作家の生命そのものであるにちがいないのだから。では、20世紀になって、なぜ殊更に、こうした問題が紛糾の渦中に投げられるのか。いろいろな理由は考えられるが、価値基準の所在を見失ったことに、大きな原因があるようだ。なにを、どこを基準としての誠実・非誠実、明晰、不明晰なのか…こゝに始まる。

もっと具体的に述べなければならない。キリスト教と芸術の結びつきは、西欧文学を発達せしめる、というより、西欧文学の土台そのものであった。一般に道徳価値とみられていたのは、宗教道徳に由来していたのであり、自由とか平等とかの観念にしてからが、キリスト教という天秤を用いることを前提としていた。ところが、その天秤は、前世紀後半より、にわかには權威を失い始めた。芸術家達は競って神の地位の篡奪に狂奔するようにな

34) 『二十世紀大学の決算』, R.-M. アルベレース, 村松剛 訳, 現代文芸評論叢書, p. 63~64

った。サルトルの ontologie が monade を避けて、 $\overset{\circ}{\text{自}} = \overset{\circ}{\text{対}} \overset{\circ}{\text{自}}$ の二元論からなるのも、一つには、そうした互解した価値の新たな樹立が意図されていたからであろう。人間が実存するとは、自ら自分を欠如とし、無化することであり、自分を自分からへだてることによって生じる空隙が価値である。その価値とは前の欠如の部分であり、それは常に未来への投企 (projet) — de devenir être という形で補充される。その堅固な論理の構築には一分の隙間もない。そこに、新しい道徳が誕生する、《morale de l'ambiguïté³⁵⁾》。

しかし、サルトルが我々に顕示してくれたこの《両義性の道徳》は、何人にも随従を強要するような、従来の意味での力を有たない。

L'ontologie ne saurait formuler elle-même des prescriptions morales. Elle s'occupe uniquement de ce qui est, et il n'est pas possible de tirer des impératifs de ses indicatifs. Elle laisse entrevoir cependant ce que sera une éthique qui prendra ses responsabilités en face d'une réalité humaine en situation.³⁶⁾

「状況のなかの人間存在」に対してのみ、みずからとるべき責任の倫理のなにかであるかを、教えてくれるのである。逆に考えるなら、この倫理では、状況の変化と推移に従った流動的な行動が要求されているようである。しかし、《人間は本質的に両義的なものである》とする、二元性から成る近代思想の特質ともいうべき曖昧性や両義性は、それだけに懦弱なポーズをとらざるをえないのではなからうか。l'Autodidacte が de sérieux の最たる者であることを明確に見破りながらも、彼に対する態度に毅然たる拒絶の姿勢が取れぬロカンタンのアキレス腱とは、この辺りのことになるのではないか。

確かに、de sérieux と sérieux の区別には厳然たるものがある。が、

35) 『Pour une morale de l'ambiguïté』, III. 5. L'Ambiguïté.

36) 『L'Être et Le Néant』, p. 720

しかし、右、左の天秤の区別がどのように明確に区別されていようと、その支点が可動的で、状況によって自由に変えられうるのでは、自信と責任に溢れた判断は得られないであろう。彼の創作の状況設定が、常に極右、極左の極端にはしるのは、その支点の置くべき位置の説明や、根拠が、自然に省かれてしまっていることを意味してはいないか。

このように考えてくると、これまでの疑問のすべてが解けるのである。『Les Mouches』におけるオレストの転向に、ドラマチックな悲壮感が漂わぬことにも、その省略が原因している。何故なら、『たとえ神が存在したとしても、何の変化も起きないであろう』のサルトルの立場は、必然的に、キリスト教徒との教義論争を避けている態度であり、人間が神の本性について十分な知識を持ちえないことを、始めから承知してかかっているところの急進的無神論宣言なのである。事実、彼の *athéisme* は充分な *polémique* の果てのものではなく、祖父母の神への無関心によるものであるらしい。³⁷⁾ 神に関する知識に欠ける《神》と《人間》の間に交わされる会話は、自然、重厚な趣きを欠き、実存的悲劇を背負うオレストの人間臭をも奪い去る。彼の、作中人物の *incarnation* の不成功は、やはりこの、踏むべき手続きを省略するところにあるのではなからうか。これは、地道な積み重ねを回避しているという点では、一種の《短絡》とも見える。*conformisme* と *christianisme* との混同も、やはりこの《短絡》の方法によるであろう。又、*l'Autodidacte* の *de sérieux* の片付け方にも、たった一つの行為で裏付けするという短兵急な措置がとられており、その説明になるべき、鍵になるべき文章の配慮はとられていないように思われる。こうした、極端から極端へ、伏線なしに飛躍する方法は、更に『魂の中の死』のマチウの行為にも波及しており、彼がドタン場において突如、過去への復讐と称して、遮二無二発砲する行為以前と、行為の開始との分岐点には空白が感じられるのである。

37) 『Les Mots』に詳しい...

《サルトルの意図は『自由への道』では、あまりにも露呈しており、もろもろの人間存在が発達してゆくあの必要な影の地帯を照らし出していない。人間存在を形づくり、それあるが故に生きた人間がつねにわれわれを驚愕させ、この上なく細心な探究手段さえ挫折させてしまうあの影そのものである。³⁸⁾》

研究手段や論理、又小説技法以外の《影の地帯》とは、先程来、度々問題としているところの《短絡》されざるべき部分と関係があるのではないか。又、ロラン・バルトが、「サルトルは描写という初歩的な力を各語にゆだねることで、効果の原則を抹殺しており、旧い文章の重要な一要素《レトリック》を完全に無視している。これは暗示的效果を消滅せしめ、現象としての文章と本質としての思想とのあいだの二元論の存在を消去してしまうことになり、自然、文章はあからさまにその裸身をさらけ出して、何の秘密も保持しえない荒々しい文章となっている。³⁹⁾」のように語っている。これは、レトリックを無視した文章の、暗示効果と秘密の欠如による貧困さを述べたものであるが、彼のプロットそのものにも感動的形式の配慮が欠けている——短絡——ように思われる。とはいえ、たとえ、糞便論的表現にもせよ、『嘔吐』は彼の作品の中では最も抒情の香り高き作品である。

38) 『戦後のフランス小説』、モーリス、ナドー、みすず、篠田浩一 訳、p. 78

39) 『零度の文章』、エクリチュール、p. 174